



# 日本SPF豚協会だより

Report of JAPAN SPF Swine Association 2014.4 第55号



提◆言

## ダブルスタンダードと動物福祉

日本SPF豚協会副会長 三枝 泰裕  
株式会社シムコ代表取締役社長

2011年3月11日14時46分、東北地方太平洋岸で日本周辺における観測史上最大の地震が発生し、その後の津波が未曾有の被害をもたらしました。その被害額は20兆円超とも言われています。また時を同じくして地震から1時間後に福島第一原子力発電所は全電源を失い、大量の放射性物質の漏洩を伴う重大な原子力事故を引き起こしました。天災・人災の相まったこの被災から早くも3年余りが経過しましたが、その復旧・復興は未だ先が見えていません。GDP世界第3位を誇る我が国の経済力は正しく機能しているのでしょうか。

安倍政権によるアベノミクスは輸出産業を中心とした大手企業の収益改善には貢献しているものの、被災者や被災地の完全復旧・復興に有効な手立てとは成り得ていません。問題となった原子力発電をみると、推進派はその安全性が担保されていると言い、原子力発電所の再開を訴えています。稼働しようとする原発は人口密度の低い過疎地を相変わらず選定しています(危険分散?)。

また、IT技術の革新的発展により教育のデジタル化を進めている反面、若者のコミュニケーション力の不足を声高に指摘する指導者も増えてきています。人間関係の希薄さがいとも簡単に重大犯罪につながっている現状が何よりの証拠かと思えます。これらの事象を省みると違和感を感じざるを得ません。まさに“ダブルスタンダード(相反論理)”現象が横行している結果のように思えます。

我々の業界においては西欧発の動物福祉(アニマルウェルファ)思想の波がジワジワと押し寄せています。折りしも一時のピークは去ったとはいえ、ペットブームは続いており、以前に比べ人々が動物と密接に関わる機会は着実に増えています。愛玩動物と経済動物(家畜)とは根本的に違いますが、動物というカテゴリーから見た福祉観念では一切の苦痛から解放されるべきという風潮が、一般では醸成されています。

一方では、畜産物に対して安心・安全は当たり前で、かつ安価なものが求められているのが現状です。物価の優等生と言われる鶏卵は育種・施設・飼料の極みをもって生産されて市場価格を実現しているわけです。それはまさに農産物というよりは工業製品に近いものがあります。しかし、生物である以上、人間同様、細菌・ウイルス等からの疾病リスクを背中合わせに持っているため、このリスクから家畜をいかに守るかは管理者のたゆまぬ努力に懸かっています。

養豚業界においてSPF豚管理システムはすべての農場で大なり小なり導入され、その優位性は自他ともに認められているところ。なぜならそのハード面およびそこから誘導されるソフト面(意識)が疾病のリスクから家畜を防衛しているからです。

動物福祉に話を戻すと、家畜(経済動物)は遺伝子改良等自らの意思でその子孫を“つなぐ”ことは出来ませんが、命を授かった(生まれた)以上、健康にして天寿を全うし、人間社会にその命を“つなぐ”ことがその役割です。したがって、短い一生を劣悪(過密・不衛生)な環境を避け、清潔かつ快適と感じられる畜舎で健康に飼育されることが何よりも大切だと思います。

我が国は戦後の著しい経済発展に伴い、食生活の欧米化が進み、畜産物の需要は飛躍的に拡大してきました。しかし、日本人は元来農耕民族で自然を神として崇め、“お陰様”の精神を根底に持っています。これはとりもなおさず感謝の“心”です。昔は家畜を家族の一員として取り扱っていたのです。しかし、市場原理主義のもと低コストを求めて、畜産経営は多頭化・大型化してきました。この過程において劣悪な環境下で家畜を、また自然を蹂躪してきた時代もありましたが、今後は消費者を含めた全ての関係者(家畜を含む)との調和を図り、併せて日本型動物福祉の在り方が確立されることを望みます。

# SPF種豚と認定農場の分布

(2014年3月末現在)

表1. 認定農場の分布

飼養母豚数	北海道	東北	関東	北信越	東海近畿	中四国	九州	合計	母豚総頭数
99以下	2	0	5	0	0	3	0	10	634
100～299	6	7	29	5	0	1	6	54	10,308
300～599	5	4	6	4	1	8	9	37	15,588
600～999	2	10	3	1	0	2	6	24	19,595
1,000以上	0	11	3	0	0	1	10	25	32,595
計	15	32	46	10	1	15	31	150	78,720
育成・肥育専門農場	1	4	10	5	0	1	12	33	
合計	16	36	56	15	1	16	43	183	
母豚総頭数	5,016	25,446	14,824	3,544	0	6,607	23,283	78,720	

表2. 認定農場数および飼養母豚数の推移

地域	2009年度		2010年度		2011年度		2012年度		2013年度	
	農場数	飼養母豚数	農場数	飼養母豚数	農場数	飼養母豚数	農場数	飼養母豚数	農場数	飼養母豚数
北海道	15	4,714	15	4,722	15	4,406	15	4,929	15	5,016
東北	35	26,459	34	26,076	34	26,310	34	26,875	32	25,446
関東	51	14,020	49	14,260	47	14,885	48	15,618	46	14,824
北信越	10	3,682	10	3,687	10	3,693	10	3,654	10	3,544
東海近畿	3	215	3	793	3	758	3	168	1	0
中四国	16	6,635	16	6,620	15	6,687	15	6,629	15	6,607
九州	30	22,403	30	21,337	30	22,322	31	22,998	31	23,283
育成・肥育専門農場	27		33		33		33		33	
全国	187	78,128	190	77,495	187	79,061	189	80,871	183	78,720

やむを得ない事情により認定を休止している農場については、戸数は集計に含め頭数は含めない。認定農場数は183（G P ・ G P 農場20、子豚育成・肉豚肥育専門農場含む）と、前年度までと比べてやや減少し、飼養母豚数も約2,000頭減少、前年度達成した8万頭の大台を下回った。これは、東北・関東地区の大・中規模農場が退会したことによるが、頭数の減少は新規農場加入や中規模農場の増頭傾向により、退会農場の飼養規模からみると低く抑えられている。農場形態の大きな変化はみられない。全国の飼養母豚数90万頭（畜産統計、平成25年2月現在）に占める認定農場S P F豚の割合は8.8%である。

# CM認定農場の生産成績

(2013年度)

表1 一貫生産農場

	件数	母豚数	生産指数	農場回転率		農場飼料要求率		出荷頭数/母豚		A薬品費/肉豚	
				実績	指数	実績	指数	実績	指数	実績	指数
基準値	112	平均	100.00	1.70	15.00	3.19	25.00	21.35	40.00	286	20.00
A	28	476	124.17	1.91	16.82	3.01	26.38	23.49	44.01	43	36.96
B	28	440	112.04	1.77	15.63	3.25	24.52	21.10	39.53	109	32.36
C	28	448	103.70	1.71	15.10	3.35	23.74	21.30	39.91	215	24.94
D	28	449	93.65	1.60	14.07	3.35	23.73	20.13	37.71	313	18.13
最高成績		908	152.35	2.37	20.94	2.25	32.37	32.32	60.54	0	39.98
最低成績		240	80.52	1.26	11.09	4.24	16.81	15.21	28.50	433	9.72
平均値		453	108.39	1.75	15.41	3.24	24.59	21.51	40.29	170	28.10

表2 繁殖専門農場－Ⅱ（分娩・離乳後、子豚を育成し出荷している農場）

	件数 10	母豚数 平均	生産指数	分娩回数／年		離乳頭数／母豚		出荷子豚数／母豚		A薬品費／子豚	
				実績	指数	実績	指数	実績	指数	実績	指数
基準値			100.00	2.30	20.00	22.53	20.00	21.43	40.00	160	20.00
A	3	1,298	124.86	2.46	21.36	25.53	22.66	24.73	46.17	43	34.67
B	3	1,296	112.61	2.30	19.97	21.09	18.73	20.86	38.94	40	34.97
C	2	940	103.33	2.37	20.62	24.25	21.53	23.03	43.00	175	18.18
D	2	890	96.61	2.41	20.98	24.21	21.50	23.72	44.27	241	9.86
最高成績		1,223	128.04	2.50	21.75	26.08	23.15	25.44	47.49	21	37.28
最低成績		907	94.91	2.21	19.18	20.08	17.83	19.81	36.97	244	9.55
平均値		1,144	111.23	2.38	20.72	23.68	21.02	23.03	42.98	108	26.50

表3 繁殖専門農場－Ⅰ（分娩・離乳後、直ちに出荷している農場）

	件数 5	母豚数 平均	生産指数	分娩回数／年		離乳頭数／母豚		出荷子豚数／母豚		A薬品費／子豚	
				実績	指数	実績	指数	実績	指数	実績	指数
基準値			100.00	2.30	20.00	22.53	20.00	22.53	40.00	90	20.00
平均値		840	111.06	2.36	20.54	24.11	21.40	24.11	42.80	62	26.31

表4 子豚育成農場（繁殖農場－Ⅰから離乳子豚を導入し、肥育用素豚として出荷している農場）

	件数 2	出荷頭数 平均	生産指数	1日平均増体重(g)		出荷率		A薬品費／子豚	
				実績	指数	実績	指数	実績	指数
基準値			100.00	445.00	40.00	95.00	40.00	70	20.00
平均値		44,789	139.66	539.64	48.52	99.07	65.17	49	26.08

表5 肥育専門農場－Ⅱ（繁殖農場－Ⅱまたは子豚育成農場から豚を導入し、肥育している農場）

	件数 18	出荷頭数 平均	生産指数	農場飼料要求率		出荷率		A薬品費／子豚	
				実績	指数	実績	指数	実績	指数
基準値			100.00	3.30	55.00	97.50	25.00	126	20.00
A	5	11,711	131.44	3.12	58.02	98.74	37.42	25	36.00
B	5	9,540	113.96	3.30	54.95	99.08	40.82	137	18.19
C	4	13,879	99.87	3.48	52.07	98.59	35.95	177	11.85
D	4	9,021	92.38	3.52	51.25	97.89	28.94	175	12.18
最高成績		1,332	137.62	2.56	67.31	99.85	48.50	2	39.73
最低成績		5,326	85.97	4.07	42.18	95.68	6.85	200	8.25
平均値		10,992	110.89	3.34	54.34	98.62	36.16	124	20.39

表6 肥育専門農場－Ⅰ（繁殖農場－Ⅰから子豚を導入し、肥育している農場）

	件数 1	出荷頭数 平均	生産指数	農場飼料要求率		出荷率		A薬品費／子豚	
				実績	指数	実績	指数	実績	指数
基準値			100.00	3.25	55.00	95.00	25.00	223	20.00
平均値		11,490	121.65	2.98	59.62	94.49	22.45	4	39.58

表7 肉豚または子豚1頭当たりA薬品費使用

一貫生産農場			繁殖専門農場－Ⅱ			肥育専門農場－Ⅱ		
薬品費／肉豚	農場数	平均金額	薬品費／子豚	農場数	平均金額	薬品費／肉豚	農場数	平均金額
100円未満	41	40	100円未満	6	41	100円未満	5	18
100円～199円	23	128	100円～199円	2	175	100円～200円	13	164
200円～299円	25	249	200円～280円	2	241			
300円～399円	19	347						
400円～450円	4	415						
	112	170		10	108		18	124
最高		0	最高		21	最高		0
最低		433	最低		244	最低		200
上位25%の平均	28	43	上位25%の平均	3	43	上位25%の平均	5	25

連載

## 豚の細菌病

<最終回>

# 細菌感染症の連載を終えるにあたって

東京農業大学教授 山本 孝史

これまで24回にわたって主な細菌感染症について連載してきました。生産者の方々にとって有用な情報が心がけてきたつもりですが、どの程度目的を達成できたか、はなはだ心許ない気がしています。今回は細菌感染症に一般的に共通する事柄について述べさせていただきます締めくくりとしたいと思います。

**細菌感染症の特徴：**細菌感染症は、ウイルス感染症より一般的に伝播力は弱いのが特徴です。人類の歴史上、コレラやペストが猛威をふるって来たことから、これらの細菌はきわめて伝播力が強いと考えられがちですが、コレラやペストといえども、現在ではさほど伝播力の強い伝染病とは考えられていません。かつては下水道が整備されておらず、またノミ等の害虫も多くて衛生環境や住環境が劣悪であった上に人々の栄養状態も悪かったため大流行し、あたかも伝播力がきわめて強いかのような錯覚を与えてしまったのです。現在の養豚現場は、これとよく似た状況にあります。

一例を挙げると、豚流行性肺炎は、罹病率がきわめて高いことから、起因菌である *Mycoplasma hyopneumoniae* (*Mhyop*) の伝播力が強いと考えられがちですが、*Mhyop* の伝播力は決して強くはありません。ではなぜ罹病率が高くなるかということ、現在の養豚場では、鼻端と鼻端の接触がまさに日常的に行われているからです。伝播力が弱くても、感染動物と未感染動物が直接接触することにより病原体が感染し、瞬く間に同一豚群に拡大してしまいます。

梅毒はコロンブスがアメリカ大陸を発見した時に「おみやげ」としてヨーロッパに持ち帰った病気ですが、それから50年程度で日本まで波及してしまいました。当時の交通事情を考えると信じられないくらい速い伝播です。いかに性行為が人類と切り離せないものであるか、また直接接触がいかに効率よく感染させるかということがわかります。現在豚がおかれている環境は、前述のようにペストやコレラが大流行した時代の人間の衛生環境や住環境と実によく似ています。人類は衛生環境や住環境を改善することでこれらの病気を克服しました。同様に、豚の環境を改善することで豚の疾

病を大幅に減らすことが可能なはずですが、人間にとって不快なことは豚にとっても不快ですから「自分がここに住んでいたなら」と考えて環境改善していただきたいと思います。寒くないか、水は自由に飲めているか、排泄物と共存していないか、もう少しゆったりできたら快適なのは等々、豚の気持ちになって飼育環境を見直してください。豚は確実に応えてくれるはずですが、

**ワクチンの限界：**細菌感染症に対するワクチンは、感染を防御することはできません。発症予防あるいは発症しても症状や病変が軽くてすむ、といった程度の効果しか期待してはいけません。費用対効果を常に念頭に置いてワクチン使用の可否を決定し、その判断の可否を生産成績から評価するよう努めていただきたいと思っています。

**抗菌薬の選択：**どのような抗菌薬を投与するかは獣医師が判断することになりますが、農場として新しい抗菌薬はできるだけ使用しないという方針を決めておくことが重要です。その方が経済的にも、またいざというときの切り札的抗菌薬を残しておくという意味からも得策だからです。また、ある細菌に対して、ある抗菌薬が耐性化したからといって、もうその抗菌薬は使えないと考えるのは誤りです。別の抗菌薬に切り替えて早ければ2～3ヶ月でまた感受性になることはよくあることです。このようなことから何も新しい抗菌薬に飛びつく必要はないということがわかります。

さらに、予防的に飼料添加剤を投与するのは極力避け、マイコプラズマ肺炎に対する例外的特例措置としてください。あるコンベ農場で、コンサル獣医師の指示でサルモネラ対策としてアミノベンジルペニシリン (ABPC) を飼料添加して与えていたところ、当該農場から分離される胸膜肺炎菌株はすべてABPCに耐性化してしまいました。そもそもサルモネラ対策としてこのような抗菌薬の使い方は効果がありませんし、「1週間以上にわたる投与は避ける」という原則も守られていませんでした。

SPF農場ではこのようなことはありえないでしょうが、他山の石としていただきたいと思います (了)。

## 豚舎周辺に生息するその他害獣

イカリ消毒(株)技術研究所 田中 和之

これまで防虫および防鼠に関することを述べてきましたが、最後にこれらに該当しない害獣であるアライグマ、ハクビシンについて解説したいと思います。

### ◆アライグマ

アライグマといえば、アニメのラスカルを連想される方も多いのではないのでしょうか？アライグマは北海道から九州まで分布し、森林、湿地、農耕地、里地、住宅地など幅広い環境で生育でき、またねぐらや巣を求め、家屋内にも侵入することがあります。食性は広く、果実や野菜、小動物、鳥のひなや卵、昆虫、甲殻類も捕食します。環境の状況に応じて様々な餌を食べる傾向にあります。メスは1歳から出産可能で、2歳以上の妊娠率は100%近くになります。年1回繁殖し、1回に1～7頭、平均3～4頭を出産します。被害は住宅の天井裏や二重壁の間、物置などに住み着き、糞尿による悪臭、騒音、シミなどがあります。また、爪が長い木などに引っかき傷を残したり、農作物を食い荒らしたりする農業被害を引き起こします。

### ◆ハクビシン

ハクビシンは漢字で「白鼻芯」と表記されることもある、鼻の白い筋模様が特徴的な動物です。ハクビシンは南方系の動物で、東南アジア、中国南東部に広く分布しています。日本では大阪府、鳥取県、大分県、沖縄県を除く43都道府県で見ついています。ハクビシンは里山的な環境を好み、人家の屋根裏の他にも洞窟や倉庫などにも営巣します。餌は果物を好みますが、落花生、ジャガイモ、野菜類などは食べません。一方、陸生の貝類、ミミズ、昆虫類、魚類、爬虫類、哺乳類などの小動物を捕食します。樹上生活をし、夜行性で複数箇所をねぐらとします。行動範囲は30～70haと広範囲で、夏から秋にかけて1年に1回2～3頭の仔を生みます。被害は住宅の天井裏や二重壁の間、物置などに住み着き、ため糞や尿による悪臭、騒音、シミな

どがあります。果実類を好んで食べるため、食害も引き起こします。

### ◆防除方法

防除方法は、ネズミの場合と似ている部分と異なる部分があります。

同じ部分としては、まず餌源となる物を排除することが重要です。具体的には農作物や残飯を放置しない、ゴミ集積場の管理をしっかりと行なう等です。これによって住みづらい環境を整えます。次に、ハクビシンやアライグマは小さな隙間から屋内に侵入可能なので、防除には隙間塞ぎが有効となります。それぞれの特徴としては、ハクビシンは樹上での移動が得意なので、10cm程の隙間から天井裏に侵入することができ、またアライグマは軒下、床下通風口などにある小さな隙間を破壊し、侵入することができます。

異なる点としては、ハクビシンやアライグマは鳥獣保護法の対象となっており、狩猟鳥獣にも指定されています。そのため、捕獲の際は狩猟免許と捕獲許可が必要になり、個人で行なうには対応が難しいことがあります。さらに、アライグマは外来生物法の対象ともなるので生体での運搬移動は禁止されています。

同じような被害を出すネズミ類と、ハクビシン・アライグマであっても、駆除する対象と保護する対象に分かれて対応に大きな差が生まれてしまうなんて、解せないのは私だけでしょうか？

<参考文献>

東海大学出版『日本の哺乳類』

兵庫県森林動物研究センター「野生鳥獣対策パンフレット」より引用

アニマルウォッチング

京都府 外来生物情報HP

PCOのための野生生物による被害防止対策  
ペストコントロール東京62

(編集部より：イカリ消毒(株)技術研究所による連載は今号で終了します。次号より大型害獣について掲載します)

## 紹介●SPFのお店⑳

# ララコープ日野店 (ララプレイス佐世保)

長崎県佐世保市日野町888-1

TEL.0956-28-3200 FAX.0956-28-0333

今回ご紹介するお店は長崎県佐世保市にある生協店舗の精肉コーナー。ララコープは1999年に県内の2つの生協が合併して誕生しました。

国産豚肉は、日野店ほか8店舗全てで本誌53号「SPFのひと」でご紹介した、同県西海市の認定農場、(有)エス・イー・ダブリュ大西海ファーム産の「大西海SPF豚」のみを取り扱っています。

松尾博之精肉担当バイヤーによると、農場の立ち上げ当初から、産直という形で展開していて「組合員や店のお客さんに高く支持されています。とくにスペアリブは身の厚さが安定していて、指名客も多いです」と組合員の評判も上々のようです。

とはいえ長崎といえば牛肉消費の強い地域。そこで、定期的に学習会や試食会などを企画し、料理法の提案なども行ない消費拡大につなげる努力もしています。店頭にも大西海SPF豚のリーフレットが。

松尾さんは「SPF豚は安全だというイメージがありますが、それも漠然としたもの。品質は安定しているけれど、取り扱いが長くなるとついPRもおろそかになりがち。組合員の認知度は高いけれど、



松尾バイヤー（左端）と精肉担当スタッフの皆さん



新しい人もいる。地元産の豚肉のよさを訴えていくためにも、何となくではなく、SPF豚のよさをきちんと伝えられる資材や機会があるといいですね」。早速SPFポークリーフレットを送らせていただきましたが、地道な努力が成果を生む一助になればと思います。

## ●協会からのお知らせ●

### ●東北地区・地域研修会を盛岡で開催

去る2月20日（木）、岩手県民情報交流センター「アイーナ」（盛岡市）において、東北地区の地域研修会を開催、CM農場生産成績の分析やSPF養豚の歴史と今後についての講演、意見交換会などが行なわれました。42名の方にご参加いただきましたが、会場がせまく、ご迷惑をおかけいたしました。

意見交換会では高成績農場の工夫点などが披露され、大変有意義だったとのご意見を多くいただきました。参加者の皆さん、ありがとうございました。

### ●理事会を開催

平成25年度の理事会を3月28日（金）、協会事務所に開催し、6月の総会に諮る議事等について協議いたしました。

### ●代議員会を6月に開催

今年度の代議員会（社員総会）は6月12日（木）開



盛岡市で行なわれた東北地区地域研修会

催の予定です。代議員の皆さまには後日ご案内をお送りいたします。次号に詳細を掲載いたします。

### ●認定委員の交代

組織内人事異動により、全農畜産サービスピラミッドの認定委員が飯田恭久氏から平井結花氏に交代いたしました。

## ヤミツキまかないタコライス

●レシピ提供・新日本料理「紀州寿し」店主 日当 孝浩（北海道札幌市）

おなじみのタコライスもSPFポークのひき肉ならおいしさアップですね。このそばろはサラダのトッピングとしても、レタスやサンチュに包んで食べてもおいしいそうです。ぜひお試し下さい。

### ●材料●（2人分）

SPF豚ひき肉 200g  
トマト（大） 1個  
レタス 2～3枚  
とろけるチーズ 適量  
卵 2個  
あたたかいごはん 好きなだけ  
塩・こしょう 適量  
にんにく 1かけ  
ナツメグ 適量  
酒 大さじ1  
サラダ油 大さじ1

### A（ソース）

ケチャップ 大さじ1  
砂糖 小さじ1/2  
しょうゆ 小さじ2  
中濃またはウスターソース 小さじ1  
チリパウダー 2～3ふり

### ●つくり方●

- ① レタスは千切り、トマトは1センチ角に切り、にんにくはみじん切りにします。卵は目玉焼きをつくります。
- ② フライパンにサラダ油とにんにくを入れて熱し、香りが出てきたらひき肉を加えて強火で表面の色が変わるまで炒めます。
- ③ ②に塩、こしょう、ナツメグを軽くふり、酒をふりかけたらトマト半量を加えさっと炒めAで味付けます。
- ④ 皿にご飯を盛り、チーズをふりかけ、レタス、残りのトマトを乗せ③をたっぷりかけて、目玉焼きを乗せれば出来上がりです。

### 【日当シェフからのアドバイス】

レタスはキャベツのように細めの千切りに。目玉焼きは半熟がおすすめです。具とご飯とレタスをざっくりと混ぜながら召し上がって下さい。お好みでスイートチリソースを大さじ1加えると、より本格的な味になります。



## ●認定情報●

### ●平成25年度認定農場

[3月認定]（有効期間：平成26年3月13日から27年3月31日まで）  
北海道・全農飼料畜産中央研究所上士幌種豚育种研究室、秋田県・（有）十和田湖高原ファーム、全農畜産サービス（株）由利本荘SPF豚センター、（株）シムコ大館GGPセンター、宮城県・サンエス丸森農場、茨城県・（有）中村畜産、全農飼料畜産中央研究所、千葉県・飯田武雄養豚場、石毛章俊養豚場、鈴木治彦養豚、飯田養豚、（株）シムコ館山事業所、（有）ピギー・ジョイ第2農場繁殖農場、同肥育農場、（有）伊藤養豚飯岡農場、（有）楠木ピッグファーム、平野英夫SPF豚農場、長野県・（農）エスピーエフこがねや第二農場、JA全農長野SPF繁

殖センター、JA大北白馬アルプス農場、富山県・（株）シムコ八尾GGPセンター、島根県・奥出雲ファーム（有）、愛媛県・JAえひめアイツパクス（株）天貢ファーム、熊本県・全農畜産サービス（株）西日本原種豚場、（有）七城SPFファーム、（有）やまとんファーム、（有）ピッグファーム陳、宮崎県・（有）守山畜産、鹿児島県・鹿児島いずみ畜産（株）出水農場、同阿久根農場

（以上30農場）

※次回認定委員会は平成26年6月5日の予定

<訂正>

前号の同欄で、（有）エクセルファーム湧水農場（鹿児島県）の農場名が、旧名称（（有）サツマ湧水事業所）のままの掲載となっておりました。お詫びして訂正いたします。



網島良信養豚場

網島 良信さん  
文代さん

●千葉県君津市

## 亡き父の教えを胸に取り組む 「子供に食べさせたい」豚肉生産

網島さんご夫妻は千葉県南部に位置する君津市で良信さんのお父さんが始められた養豚場を引き継ぎ、200頭規模の一貫経営をされています。もともと千葉県北西部の習志野市、津田沼駅近くの食料品店を経営されていたお父さんが、線路拡大にかかり移転を余儀なくされたとき選んだのが養豚で、君津市に土地を入手し一から農場を立ち上げました。

良信さんが移り住んだのは小学5年生のとき。「馬を買ってやるから、といわれて。当時は道路も舗装されてなかった山の中でしたよ」。

進学した東京の大学は商学部。跡継ぎという意識はなかったものの、休みのときには実家に戻り、当時併設してあった牛舎の掃除が役目でした。「やらなきゃ学費を出してくれないから」といいつつも「きらいではなかったかな」。卒業後、2年ほど県内の中核農場等で研修ののち、本格的に養豚に取り組みました。

君津市内のサラリーマン家庭に育った文代さんも子育てのかたわら農場に。「結婚するときはやらなくていい、といわれたんですけどねえ(笑)。たまたま従業員が辞めてしまって…。本当に厳しい父でした。2人とも毎日勉強、勉強で鍛えられて。でも、そのおかげで今があります」と文代さん。しばらくしてお父さんが病に倒れ、お二人が若くして後を継ぐことに。



網島良信さん、文代さんご夫妻

SPF養豚との出会いは平成6年。更新に悩んでいたこともあって変換を決意、榊林商店肉豚出荷組合に加入しました。協会認定制度がスタートした当初からの、先駆的農場の一つです。

お二人がこだわるのは「子供たちに食べさせたい豚肉を作る」こと。味を知ってもらうため直売にも力を入れています。まずは近所から始めた飛び込み販売が口コミで評判となり、今ではその数なんと200軒。自農場産を買い戻し、地元君津や木更津市を中心に文代さんが月3回に分けて、直接届けています。テレビのニュース番組で取り上げられたこともあるとか。「一度買ってもらおうと『スーパーの肉は食べられない』といってくれます」と文代さん。

お二人はサッカーのJリーグチーム、ジェフ千葉の熱心なサポーター。オシム・元日本代表監督がチーム監督だった頃、豚肉を差し入れたこともあるそうです。「2人でチームの追っかけやるのが夢かな」(文代さん)。

「うちは奥さんでもってる、ということにしておいて」と笑顔の良信さん。お二人の仲のよさ、パワフルなお仕事ぶり、真摯なお人柄がうかがえました。(編集部)

**編集後記** PEDとの対峙、日頃培ったSPF養豚の防疫システムがまさに試されようとしています。誰も見ていなくてもやることはやる。人は誰でも思い違いや慣れによる手抜きをしがちです。妥協を許さない強い気持ちを持ち続ける必要があります。とはいえ緊張感を持続させるのは困難です。感染を防ぐための「外部との遮断」で、やるべきこと、やってはならないことを紙に書いて毎日目にする場所に貼り、気持ちを引き締めましょう。山本先生の連載は今回で終了となりました。6年余の長きにわたり、本当にありがとうございました。(世)



日本SPF豚協会認定農場産シール

このマークは  
**日本SPF豚協会**の  
登録商標です

### 日本SPF豚協会だより

第55号 2014年4月1日発行(季刊)  
発行 一般社団法人 日本SPF豚協会  
〒101-0032 東京都千代田区岩本町1-8-2  
TEL.03-5835-5375 FAX.03-5835-5376  
e-mail : j.spf.a@nifty.com  
http://www.j-spf.com/  
発行人 北島 克好  
編集人 藤田 世秀